



ネイピア数の定義（極限値の存在）

ネイピア数¹ や自然対数の底と呼ばれる無理数 $e = 2.71828182845904523536\dots$ は、極限値

$$e := \lim_{h \rightarrow 0} (1+h)^{\frac{1}{h}} \quad (1)$$

として定義されるのであった。本稿では、この定義の正当性を確認する。すなわち、次を証明する。

定理. 極限値

$$\lim_{h \rightarrow 0} (1+h)^{\frac{1}{h}}$$

が存在する。

定理の証明のために、いくつか補題を用意する。以下では、

$$\text{関数 } f(x) = (1+x)^{\frac{1}{x}}, \quad \text{数列 } a_n = \left(1 + \frac{1}{n}\right)^n$$

とする。

補題 1. 数列 a_n がある値に収束すると仮定すると、関数 $f(x)$ は、 $x \rightarrow 0$ で同じ値に収束する²。

証明. 数列 a_n が、ある実数 α に収束すると仮定する。

$$g(x) = f\left(\frac{1}{x}\right) = \left(1 + \frac{1}{x}\right)^x$$

とおくと、 $f(x) = g\left(\frac{1}{x}\right)$ であり、 $x \rightarrow \pm 0$ のとき、 $\frac{1}{x} \rightarrow \pm\infty$ なので、 $\lim_{x \rightarrow 0} f(x) = \alpha$ を示すためには、

$$\lim_{x \rightarrow \infty} g(x) = \alpha \quad \text{かつ} \quad \lim_{x \rightarrow -\infty} g(x) = \alpha$$

を示せば良い。まずは、 $\lim_{x \rightarrow \infty} g(x) = \alpha$ を示す。 $x > 0$ を仮定して良い。 x に対して、ある自然数 n_x が存在して、 $n_x \leq x < n_x + 1$ をみताす。このとき、 $\frac{1}{n_x+1} < \frac{1}{x} \leq \frac{1}{n_x}$ であるので、次が成り立つ。

$$\left(1 + \frac{1}{n_x+1}\right)^{n_x} < \left(1 + \frac{1}{x}\right)^x < \left(1 + \frac{1}{n_x}\right)^{n_x+1}$$

ここで、 $x \rightarrow \infty$ のとき、 $n_x \rightarrow \infty$ であり、数列 a_n が α に収束するという仮定から、

$$\lim_{n_x \rightarrow \infty} \left(1 + \frac{1}{n_x+1}\right)^{n_x} = \lim_{n_x \rightarrow \infty} \left(1 + \frac{1}{n_x+1}\right)^{n_x+1} \left(1 + \frac{1}{n_x+1}\right)^{-1} = \alpha,$$

$$\lim_{n_x \rightarrow \infty} \left(1 + \frac{1}{n_x}\right)^{n_x+1} = \lim_{n_x \rightarrow \infty} \left(1 + \frac{1}{n_x}\right)^{n_x} \left(1 + \frac{1}{n_x}\right) = \alpha$$

が成り立つので、はさみうちの原理から、 $\lim_{x \rightarrow \infty} g(x) = \alpha$ が成り立つ。次に、 $\lim_{x \rightarrow -\infty} g(x)$ は、

$$\lim_{x \rightarrow -\infty} g(x) = \lim_{x \rightarrow \infty} g(-x) = \lim_{x \rightarrow \infty} \left(1 + \frac{1}{-x}\right)^{-x} = \lim_{x \rightarrow \infty} \left(1 - \frac{1}{x}\right)^{-x}$$

であり、

$$\left(1 - \frac{1}{x}\right)^{-x} = \left(\frac{x}{x-1}\right)^x = \left(\frac{x-1}{x-1} + \frac{1}{x-1}\right)^x = \left(1 + \frac{1}{x-1}\right)^x = \left(1 + \frac{1}{x-1}\right)^{x-1} \left(1 + \frac{1}{x-1}\right)$$

と計算できるので、上の結果を用いて、 $\lim_{x \rightarrow -\infty} g(x) = \alpha$ が従う。□

¹スコットランドの数学者 John Napier に由来する。

²数列の極限と関数の極限の違いには注意しなければならない。これらの詳しい関係については、関数の極限と数列の極限の関係 <https://gleamath.com/lim-of-funcs-and-seqs> を参照。

補題 2. 任意の自然数 n について、 $a_n < 3$ である。すなわち、数列 a_n は上に有界である。

証明. 二項定理を用いて、 a_n は次のように計算できる。

$$\begin{aligned}
 a_n &= \left(1 + \frac{1}{n}\right)^n = \sum_{k=0}^n {}_n C_k \left(\frac{1}{n}\right)^k \\
 &= 1 + \sum_{k=1}^n {}_n C_k \left(\frac{1}{n}\right)^k \\
 &= 1 + \sum_{k=1}^n \frac{n(n-1)(n-2)\cdots(n-k+1)}{k!} \left(\frac{1}{n}\right)^k \\
 &= 1 + \sum_{k=1}^n \frac{1}{k!} \left(1 - \frac{1}{n}\right) \left(1 - \frac{2}{n}\right) \cdots \left(1 - \frac{k-1}{n}\right)
 \end{aligned} \tag{2}$$

ここで、 $i = 1, 2, \dots, k-1$ に対して、 $\left(1 - \frac{i}{n}\right) < 1$ であることと、任意の自然数 n に対して、 $n! \geq 2^{n-1}$ であること³に注意し、等比数列の和の公式を思い出すと、 a_n はさらに、

$$a_n \leq 1 + \sum_{k=1}^n \frac{1}{k!} \leq 1 + \sum_{k=1}^n \frac{1}{2^{k-1}} = 1 + \frac{1 - \left(\frac{1}{2}\right)^n}{1 - \frac{1}{2}} = 1 + 2 \left\{1 - \left(\frac{1}{2}\right)^n\right\} = 3 - \frac{1}{2^{n-1}} < 3$$

と評価できる。よって主張が従う。 □

補題 3. 任意の自然数 n について、 $a_n < a_{n+1}$ である。すなわち、数列 a_n は単調増加である。

証明. 上の (2) 式と同様に、 a_{n+1} は、

$$a_{n+1} = 1 + \sum_{k=1}^{n+1} \frac{1}{k!} \left(1 - \frac{1}{n+1}\right) \left(1 - \frac{2}{n+1}\right) \cdots \left(1 - \frac{k-1}{n+1}\right)$$

と計算でき、さらにこれは、 $i = 1, 2, \dots, k-1$ に対して、 $0 < \left(1 - \frac{i}{n}\right) < \left(1 - \frac{i}{n+1}\right)$ であることに注意すると、

$$\begin{aligned}
 a_{n+1} &> 1 + \sum_{k=1}^n \frac{1}{k!} \left(1 - \frac{1}{n+1}\right) \left(1 - \frac{2}{n+1}\right) \cdots \left(1 - \frac{k-1}{n+1}\right) \\
 &> 1 + \sum_{k=1}^n \frac{1}{k!} \left(1 - \frac{1}{n}\right) \left(1 - \frac{2}{n}\right) \cdots \left(1 - \frac{k-1}{n}\right) \\
 &= a_n
 \end{aligned}$$

と評価できる。よって主張が従う。 □

最後に、補題 1, 2, 3 を用いて、定理を証明する。

定理の証明. 補題 2, 3 から、 a_n は上に有界な単調増加数列である。よって、有界単調数列の収束性⁴ から、数列 a_n はある値に収束する。このとき、補題 1 から、 $x \rightarrow 0$ で関数 $f(x)$ は収束する。すなわち、極限值 $\lim_{h \rightarrow 0} (1+h)^{\frac{1}{h}}$ が存在する。 □

補足. 定理を証明するために、数列 a_n を考えるというかなり回りくどい議論を行ったが、それは、ネイピア数 e を関数 $f(x)$ の $x \rightarrow 0$ での極限值として定義しているからである。はじめから、 e を数列 a_n の極限值として定義していれば、補題 1 は不要である。実際、大学の微積分学ではそのように定義されることが多い。

³数学的帰納法で証明できる。

⁴<https://gleamath.com/bounded-monotone-sequence-convergence>